

# 松村昌家先生追悼

## —— お送りしなかったメール ——

鈴江 璋子

〈マイドキュメント〉の片隅に、松村昌家先生、と宛名を書いたまま、お送りしなかったメールがある。日付は2009年10月27日。日本ギヤスケル協会第21回全国大会の直後であり、まず大会にご出席頂き、大会でも、懇親会でも、貴重なご発言を頂いたことへのお礼を申し述べている。当時私は会長職に在ったから、職務上当然の礼儀である。そして「マーチャント、マンチェスター、大阪」と熱を込めておっしゃったのが心に残りました」と書いている。

当時はマンチェスターも大阪も、それぞれ首都に次ぐ、その国第二の都市であつて、大阪は「煙の都」「水の都」と呼ばれるほどに迫力ある大商工業都市であり、マンチェスターも、産業革命の中心として綿工業で栄えた大商工業都市であつたから、両都市が肩を並べるのはむしろ当然と感じられた。

当時講師を勤めていた町田市の読書会で、その話をしたところ「そうです、その通りです。大阪も紡績で栄えた町で、私が子供の頃は煙突から石炭を焚く黒い煙がもくもく出ていて、朝と夕方に廊下を拭き掃除すると、雑巾が真っ黒になったものでした」という反応が御座にあつた。たぶん朝鮮戦争の特需で、イトヘン景気に沸いた時代の話だろう、と考え「そういえば、クラボウとか、東亜紡、呉羽紡など、大きい会社はみな紡績会社でしたね」と返したら「そうです。そういう会社はみな、大阪に工場があつたんです。紡績には水が必要で、淀川の水をジャブジャブ使つて、織物を洗つたのです」と答えられ、改めて驚いたのだった。私は染物に水が必要なことは、よく知っていたけれど、紡績に水が必要だとは知らなかつた。マンチェスターに、そんなに水があるのだろうか、淀川と肩を並べるような、大きな川があるのだろうか。水に関して疑問を持ちながら、私は松村先生に提案している。

「先生、自分でもの言えない町や土地のことは、人間が記憶して、語り継がなければなりません。先生の〈マーチャント、マンチェスター、大阪〉を拡大し

て、土地と文学をインターフェイスしたシンポジウムを、来年、2010年のヴィクトリア朝文化研究学会の大会で、開いて頂けないでしょうか。文学に描かれたのではなく、現実の町のたたずまいと変貌を語ることが出来る、実際の住人の大阪話やマンチェスター話、自分で紡績業を営んだ人の話を聞くのは、いかがでしょうか？戦争にからんで、マーチャントが巨大な富を動かし、政治を動かすのも確かなことで、国のモラルを検証することも必要です。」

このメールをお送りしなかったのは、2010年に、エリザベス・ギヤスケル生誕200年を記念して、その名と業績がウエストミンスター寺院の詩人コーナーの窓に刻まれる、という祝典があるのを知ったからだだった。それに出席しよう、実際にマンチェスターを見て、その後、然るべき提案を、と考えたのだった。

だが、2010年のマンチェスターは、想像とは全く異なっていた。宿泊したブリタニア・ホテルが、織り上がった綿布を収納する倉庫を改装したもので、上階には窓がない構造だったが、ほかに往時をしのぶ要素は何一つなかった。

アーウェル川は狭く深い野生的な川で、淀川の足元にも全く及ばない。紡績に利用されたのは運河や、Piccadilly basin、Ontario basinなどの巨大な人造池であったろう。運河の大半は埋め立てられてしまったが、いくつかは残されていて、豊かな量の水が、満々と、静かに、建物を囲んでたゆたい、流れる。人間が利用する機能としての、巨大な量の水に圧倒された私に＜マーチャント、マンチェスター、大阪＞を考える余裕はなかった。

帰国後、松村先生から「マンチェスター美術名宝博覧会に使われた建物は、まだ残っていますか」とお尋ねがあったとき、私は「はい、プールがある、大型の体育施設になっています」とお答えできた。プールにしては妙に典雅な装飾があるのが気になって、確かめておいたのだった。

ここで妙に思い出されるのが「京都がパリと似ているのは、川が町の真ん中を流れているからではない」という一言である。京都はパリと姉妹都市なのだが、たぶんそれが決まったときに、誰か、おそらく京都学派の京都人が言った言葉だろう。地政学的に、ではなくて、歴史・文化、そして国の、いや、実は世界の中心であるという点で、京都はパリに似ているのだ、と言いたい京都人の矜持の、京都らしく面倒な表現なのだと思ふ。

マンチェスターは現在、鹿児島県と姉妹都市になっている。だが、少々違う気

もする。松村先生がマンチェスターを、規模も地勢も、住民の気質も違う大阪と並べられたのは、先生がこの二つの土地の上に、ひとしく熱い愛を注がれていたからなのだ。

松村昌家先生は学部も大学院も大阪で修められ、同志社大学教授・神戸女学院大学教授・甲南大学教授を経て、大手前大学教授になられた。非常に博識でありながら、よく整理された学風で、明快かつ実証的であり、魅力的である。〈知っていることも教えない〉京都学派とは違って、知識のない人間にも理解できるように、懇切にご指導くださり、ひとの苦勞が分かる先生のように、私は思った。ギャスケル協会が関西で大会を開くときには会場をご提供くださり、来日したジョウン・リーチさんを晩餐にお招きくださった。お住まいはずっと京都市右京区である。先生の京都・大阪・マンチェスターについての、英文学者・比較文学者としてのお考えを、一度、ゆっくり伺っておきたかった。

(日本ギャスケル協会第2代会長 実践女子大学名誉教授)